

# 学校・家庭・地域の力を結集して 子どもたちの成長を支えよう！

## 『悪戦苦闘能力』を学校・家庭・地域の力で 基本は元気なあいさつから

11月1日の「おおいた教育の日」推進大会での、九州ルーテル学院大学客員教授の大畑誠也先生による講演内容をご紹介します。

大畑先生は、熊本県で、存続の危ぶまれる高校の入学者を増加させたり、活気を失った旧名門校を復活させるなど、6つの学校の立て直しを行った名校長として全国に名を馳せておられます。

校長として赴任された高校では、「悪戦苦闘能力」の必要性を教師や生徒が納得のいくまで説明し、実践できるようになるまで、あの手この手を使って徹底させ、生徒たちを見事に変容させていきました。

講演では、高校での実践をもとに、21世紀を生き抜くために「挨拶・体力・感性・集中・思考」の5つの『悪戦苦闘能力』の大切さを、熊本弁丸出しでエネルギーッシュに話されました。

「悪戦苦闘能力」は具体的な行動に表れるとお話されましたが、皆さんには、次のことがいくつ当てはまるでしょうか？

- ① 大きな声で挨拶や返事をしている。
- ② 朝ご飯の味噌汁は箸が倒れないくらい具が多く入っている。
- ③ 朝ご飯と昼ご飯と夕ご飯の割合は3：2：1である。
- ④ 家の手伝いをよくしている（させている）。
- ⑤ 自分の夢や目標を持っている。
- ⑥ 本をよく読んでいる。
- ⑦ 人の話を聞くときは、必ずメモを取っている。

大畑先生は、5つの『悪戦苦闘能力』について、次のようにお話されました。

### 挨拶

挨拶をするということは、人を認めるということです。コミュニケーションが一番大切なのが、人を認め、認められることです。挨拶はコミュニケーションのスタートラインであり、人間関係の第一歩になるのです。だから、挨拶が一番重要です。

### 体力

挨拶をしても大きな声がでない、運動をしてもすぐへばる、午後の授業は居眠りばかりしている。朝ご飯を食べないと、1日乗り切る体力も身に付きません。食べるだけでなく、中身が重要です。

### 感性

感性とは人間関係の感性。すなわち、人の気持ちが分かる人間であるかどうかです。人の気持ちが分かるようになるには、体験が必要で、最も日常的で効果的な体験が家の手伝いです。手伝いをすることで、自

分の存在を認められる喜びを感じ、感謝や思いやりを実感し、仕事の段取りを身に付けるようになるのです。

### 集中

集中は、目標があることで生まれます。だから、小さい頃から子どもに将来の目標を持つように迫ることが大切です。目標への「思い(思いつき)」が「想い(方向と持続性が定まる)」となり、そして「思い(確信)」となるよう、具体的に体験させるなど、親や教師の手助けが必要です。

### 思考

自分の考えを持つことが大切です。そのためには、世の中の人ができるようなことを考えているのかを知ることが必要であり、最も簡単なのが本を読むことです。本でなければ、人の話を聞くことでもかまいません。本を読んだり、メモを取りながら話を聞いたりして、自分の考えを持てるようにします。

さて、いかがでしょうか。挨拶が大切なこと、朝ご飯が大切なこと、家の手伝いが必要なことなど、大畑先生が実践を目指すものは、十分承知されており、目新しいことではないでしょう。

ただ、人として本当に大事なことは、意外と当たり前のこととして見過ごされているのかもしれない。

大畑先生は言われます。「凡事徹底。当たり前のことをやり続けた人だけが本物になる。」まずは、親や教師が実践することです。基本は、親子で、夫婦で、元気な挨拶を交わすことから始まります。



「小・中・高等学校・大学等の部」  
大分県教育の日推進会議会長賞（最優秀賞）

「おおいた教育の日」エッセー  
「わたしの心に残ること」

大分県立佐伯鶴城高等学校  
2年 吉田 月葉



現代の社会は、便利な物に溢れ、多様化した機能で私たちの生活を豊かにしている。しかし、それらを使う者にはマナーが必要である。例えば、電車の中で携帯電話を使用することや大音量で音楽を聴くことなどは、周囲の迷惑になる。私が実際に目にして問題だと思ったのは、歩道の点字ブロック上に停めている自転車である。それを見てとても不快だった。目の不自由な人のことを何も考えていない行動に憤慨した。「なぜもう少し別の場所へ移動させることができなかったのか」と。自転車を停める時に場所を考えて停めることは、ほんの数秒時間をとるだけの小さな思いやりである。しかし、その数秒を惜しむことで、目の不自由な人がその自転車にぶつかり、こけてしまうこともあるのだ。そうなると倒れた自転車を立て直すにはとても時間がかかるし、打ち所が悪ければ一生残る傷になるだろう。そんなことも考えずに停めるのは、最低の行為だと感じた。しかし、本当に反省すべきは、私自身だったのである。このように考えるようになったのは、ある出来事からだ。

私の父は頑固で、よく言えば意志の強い人である。自分の正しいと思ったことは、誰に何を言われようと考えを要えることはない。常に自分の行動に自信を持っているようで、それが私にはとてももうとうしかった。すべて自分が正しいかのように説教をする父が嫌いだったのだ。そんな父と、たまたま電車に乗っていた時の話である。その電車の中には十数人の乗客がいて、席はまばらに空いていた。父と私は、手すりに掴まって立っていたが、電車の揺れは大きく、手すりがないと転びそうだった。そこに白い杖を持った一人の男性が乗車してきて、ドアのすぐ前で立っていた。私は白い杖が、目が不自由であることを意味していると知っていたので、手を貸すべきかどうかとうとう悩んだ。目の見える私たちでも手すりに掴まっているのがやっとなのに、目が不自由な人が転ばずに立っているのは難しいはずだ。そう思いながら周りを見てみると、見て見ぬふりをする人や、ちらちらと男性を見てい

る人もいた。みんなその男性が目が不自由であることに気付いているようだったが、誰一人動こうとしなかった。すると私の横にいた父がすぐに男性の所へ行き、声をかけた。男性はにっこりと笑って、父に手を引かれながら空いていた席に座った。戻ってきた父に、私がさっき考えていたことを伝えると、「思うことと、実際に行動することとは違う。行動しなければ、思っていないのと同じだ。後悔する前に行動に移せ」と言われた。父の言葉を聞きながら、ふと男性の方を見ると、さっき男性を見ていた人がその横に座って、腕を掴んで支えていた。一人が行動することによって、周りが変わったのだ。

この時「思うことと行動することの勇気は別であること」、「まず自分が行動することによって周りが変わることを実感として知った。更に私は点字ブロック上に置かれた自転車のことを思い出した。あの時、私は不快には思っていたものの、何も行動に移さなかった。その自転車を見ていながら何もせずに通り過ぎたのは、目の不自由な人のことを考えていないのと同じではないか。あの時、私にできることがあったはずである。「もう後悔したくない。」と思った私は「したほうがよいと思ったこと」や「迷ったこと」はやってみようと思決心した。

私はこの時から、行動することの価値を言葉ではなく、自らの行動で伝えてくれた父を尊敬するようになった。私も父のように行動できる人になりたい。そうすれば自分に自信が持て、人の行動を不快に思う時間も減り、私の心は平和だろう。「文明は進化していく。しかし、便利な機器は、人間のモラルの下で使われなければ凶器と同じになる。」とどこかで読んだが、今はこのことが実感として分かる。

「思いやりのある行動」の価値が、一人でも多くの人に伝わればと思い、この時の体験を「書く」という行動に移した私である。